

# 家庭科

藤本文乃

## 1 家庭科における知識創造とは

家庭科における知識創造の定義

家庭科における知識創造を次のように定義する。

日常生活にかかわる課題を解決していく活動を通して 日常生活に必要な知識や技能を自分にとって意味のあるものとして実感をもってとらえ 身につけながら 生活をよりよくするために活かしていこうとする営み

家庭科の学習が始まる5年生までに、子どもはそれぞれの生活の中で個々に家庭科のスキーマを培ってきているが、それは断片的であったり個人差が大きかったりする。子どもにとって自分の生活の仕方が当たり前であり、校区がない本校の子どもは、友達の家遊びに行くことが少なく、違う生活の仕方に気づく機会は少ない。そして、今日の子供は、家事労働の経験や衣食住に関する行為そのものに関心を持って見ることも少なく、その行為には意味があることにあまり気づいていない。

このような状況で生活に必要な知識や技能を伝達的に教えられても、それは実感の伴わない単なる知識であり、自分の生活と結びつけ生活の中に活かすことは難しい。そこで、まず自分の思いや願いに基づいて自分の家庭生活を見つめ直す中から課題をもち、友達などかかわりながら解決していくことを通して、様々な家庭生活に関する知識や技能を習得しそれを生活の中で活かすことの意味に気づいていく。そして、自分の生活をよりよく快適にすることができる知識や技能としてそれを身につけていくことを大切にしていきたい。

生活の中での試行や実践

さらに、それらを自分の生活の中にもどのように活かせるかを考え試行や実践を行う。自分の生活が、知識や技能を生かし工夫をすることでよりよくなること、自分も生活主体者として、より多くの選択肢の中から生活にかかわることを選んだり行ったりできること、家族のために何かができることに気づいたり実感したりすることが、生活をよりよくしてこうとする意思と実践力を育てていくと考える。このような実践を積み重ね自己有用感を高めていくことが、自ら生活課題を見つけ解決していける自立した生活者としての基礎を培っていくであろう。

自己有用感を高める

## 2 家庭科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

認知と変容の実感の積み重ねによる実践力

家庭科では、子どもが日常生活に関する知識や技能を身につけてきた過程をふり返り、それを自分にとって意味のあるものととらえ当事者意識をもってその後の学習や生活に活かそうとしているとき、プロセスを自覚している姿をとらえる。子どもが、授業での学びと自身の生活が結びついていることを認知し、自己の変容を実感していけるようにしたい。また、この認知の積み重ねが以後の学習でもそれを活かして主体的に学習を進めていく力となると考える。

### (1) 家庭科における「よさ」

四つのよさ

家庭科における「よさ」を以下の四つと考える。

日常生活には、家庭生活や学校生活、広く社会生活全てを含むものととらえる

一つ目は、子どもが自分の日常生活に疑問や課題を見出し、なぜかな、よりよくしたいなどの思いを持ち学習への必要感を持って学びをスタートできることである。生活の仕方が一人一人違う基盤に立つ子どもが、その違いを共有することで共通の課題をもち、みんなでその解決に向かう。子どもは自分とは違う生活の仕方や考え方を新鮮に受け止め、自分の生活の仕方だけが全てではないことに気づき、学習へ向かうことができる。

二つ目は、課題解決の方法が共通であったり個々で違ったりすることである。そのため課題解決のためには自ずと友達とかかわる必要が生まれ、多様な見方、考え方を知ることができる。

三つ目は、課題解決において、実践的・体験的活動を取り入れ、実感を伴いながら学ぶことができることである。単なる言語的な知識でなく、おいしい、涼しい、暖かい、心地よいなど、五感を伴う学びをすることができる。

四つ目は、学んだことを生活の中で自分なりに活用・応用しやすいことでありそれによりできた喜びを感じられることである。

このように、知識創造のプロセスでそれぞれのよさが共有されていくことを重ねていくことで、自分の力で実践していこうとする意欲、実践できる力が育まれていくのである。

## (2) 「よさ」の共有のための手だて

### ① 可視化

生活を見つめる時間

子どもが自分の日常生活に疑問や課題を見出すために、自己や家族の生活の中の営みを見つめる時間をとる。その時に、具体的な課題設定につながるように調査や観察の観点を明確にしておく。見たり聞いたりして調べたことを文だけでなく絵や写真などを使い表現させ、それに対する自分、時には家族の思いを文章化させることで今の自分の現状を認識できるようにする。そうすることで調べたことや思いを友達と交流しやすくなり、共通点や差異・疑問などが明確化され、自己の認識や習得レベルを客観的にとらえ、課題をもつことができると考える。

課題解決においては、多様な資料や実験方法を目的に応じて提示し学び方を選び取っていけるようにする。その際、ワークシートや板書などを工夫しその目的、結果、生活に活かせることの観点を示し、自分の課題解決の道筋が自覚できるようにする。そして、課題解決の途中で機を逃さず、友達の生活の工夫や生活をよりよくするための考え方の変化や学び方の「よさ」を価値づけ、ふりかえりを残していく。

### ② 「かかわり」

グループ構成や人数の変化

題材や扱う教材によって、グループ構成・人数を変化させることで、多様な生活実態だからこそ生まれる考え方が表出されるようにする。また、全体に共通する大きな課題をおさえた上で、個々の生活実態や課題に対応できる課題選択型の構成も取り入れる。例えば、「快適な住まい方を考えよう」という共通の課題から、個々に「暖かさ」「明るさ」「風通し」などの課題を持つことである。自分とはちがう課題の取り組み方や成果を交流するときには、自分の生活への関連や応用を考えることを促していく。

何によって、課題解決に結びついたり知識や技能が自分にとって有意味化されたりしたかが明確になるように、グループでの活動や全体での活動のかかわりを評価する観点を明らかにし、学級全体で共有することで、子どもが多様な価値観や生活実態をもつ仲間と共に意義を意識して以後の学習へも活かしていくことができる。

家庭実践を促す

題材ごとに学習の最後には生活に活かす場を設定し、題材に応じて全員に「家庭科実践カード」を配布し家庭実践を行うように働きかける。学級通信で学習のめあてや内容を伝え家庭との連携を図りながら主体的な実践を支援する。実践後は実践の様子とその結果の交流を行い、仲間にも認められる喜びを味わうとともに、友達の実践から新たな生活の工夫や知識、価値観を取り入れる機会を持つことができ、さらなる実践への意欲を高めていくことになる。

### ③ 実践的自覚へのデザイン

二段階の実践

学びによって得た知識や技能を、日常生活の中で実践していくことが家庭科のねらいである。その実践の仕方にも段階があると考え。個人差はあるが、授業を通して学んだ基礎的・基本的な知識や技能を、そのままやってみることが始めである。さらに、実践してみたことから新たな気づきが生まれ、自分や家庭にあったやり方を工夫してやってみることが、発展応用であるといえよう。そのためには、成功経験だけでなく失敗経験も意味のあることとして価値づけていく。また、自己の変容や頑張りを家族や友達から認めてもらうことが、自分が学んだことへの有用感の認識になる。前述したように取り組みの様子をお互いに見たり聞いたりできるような工夫をすると共に、家族の協力も仰いでいく。「生活に活かそう」という呼びかけだけでは子どもは実践に向かわないと考える。そこで、家庭実践をやるべき課題と位置づけ長期休暇での取り組みも働きかけていく。

家庭との連携と長期休暇の利用

知識創造のプロセスのくり返し

「生活を見つめる→課題をもつ→実践的・体験的活動を取り入れて解決する→生活に活かす」という知識創造のプロセスをくり返し行い、子どもに意識づけていく。そのプロセスの中で自分の変容をふり返り、自分の成長や家庭生活における価値や存在の自覚を高めていくことが、よりよくしようという視点で日々の生活を見つめ自分から実践しようとする力となっていくと考える。

### 3 実践例 - 6年 -

#### (1) 題材名 レッツトライ！～夏休みホームプロジェクト～

#### (2) 本題材における知識創造

夏休みの自分の生活をよりよくするために 1学期の学びをどのように活かしたらよいかを考え 工夫して実践し 生活に活かす意義や喜びに気づいていく営み

1学期の題材は、生活時間の使い方、ごはんのみそ汁、衣服の選び方と手入れの仕方についてである。子どもはそれぞれの学習を通して、自分の生活を見つめること、実物にふれることや簡単な実験や比較、基礎・基本を習得する実習などを行い、それぞれの生活実態や気づいたこと、分かったことなどを話し合いながら学習を進めてきた。学習後には家庭実践を行っている。本題材は、1学期の学習の発展的な扱いとして位置づけられる。長期休暇である夏休みは、これまでの家庭生活の課題を洗い出し解決の方向を見出し、家庭科の学びを活かす良い機会である。子どもはこれまで5回の夏休みを経験してきている。低学年の時と違って6年生ともなれば、自立した自分の生活を意識することはもとより、家族の一員としての自覚を持った生活が望まれる。1学期の家庭科の学びをふり返り、夏休みの生活をよりよくするために家族にもはたらきかけ、自分でできることを考えてホームプロジェクトとして実践することとする。

まず、それぞれの1学期の学習内容を、学び方と思考の視点でふり返る。個々が有意味化したことには差異があると思われる。そこで、それを出し合うことで「よさ」を共有すると共に、自分に不足していたり気づかなかつたりしたことが見えてくる。そして、これまでの夏休みの自分の生活の仕方を想起し課題を洗い出し、何をどのようにして実践すればその課題をクリアできるかを考え計画書を作成する。計画書は家の人にも説明し協力を求め家庭実践を行う。その成果は、レポートとしてまとめ夏休み後に実践交流会を行う。全員で家庭実践に取り組み成果を交流するゴールをもつことで、自分の家庭生活を自分でよりよい楽しいものとして創っていくことを明確に意識する。家庭での体験から新たな課題や自分なりの工夫が生じて、よりよくできる達成感や家族から認められる自己有用感が高まるであろう。さらに実践交流会での友達や教師からの評価によって、実践への意欲が持続していく。このような体験を通して、子どもはこれからも当事者意識をもって家庭科の学習に取り組み、自分の生活をよりよくしようとする実践的な力を育てていくと考える。

#### (3) 家庭科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

##### ① 本題材における「よさ」

本題材は、1学期の学びを受けての発展題材である。これまでの学びのプロセスの自覚を子どもがしないと成立しない題材である。また、学んだことを自分で考え計画して自分の生活に活かしその「よさ」を実感し、できた自分に喜びを感じることができる題材でもある。すなわち題材そのものがプロセスの自覚を促し「よさ」を認知し、実践し実践的自覚を促す道を進む。ホームプロジェクトの計画を立てるまでは教科論で述べた一つ目・二つ目の「よさ」であり、夏休みの家庭実践が三つ目・四つ目の「よさ」であり、実践交流会が実践的な自覚を促していくこととなる。これを本題材の「よさ」ととらえる。

##### ② 「よさ」の共有のための手だて

本題材で知識創造に向かうための「よさ」の共有の場は大きく以下の三つととらえる。

- ・ 1学期の学びをふり返る場
- ・ 自分の夏休みの課題をつかみ課題解決の見通しを持つ場
- ・ 実践交流会で個々の「よさ」を共有する場

この三つの場で四つの「よさ」が共有できるようにしていく。

##### ア 可視化

1学期の学びをふり返る場では、まず自分のこれまでのワークシートを見直したり、今の自分の生活実態を見つめたりする時間を設定する。それをもとにみんなで話し合い、個々が考えていることや獲得したことをみんなで見合わせるようにする。学び方や考え方、新たな知識や技能、生活に活かす工夫などの視点を明らかにして「よさ」を価値づけていく。

自分の夏休みの課題をつかみ課題解決の見通しをもつ場では、これまでの自分の夏休みの過ごし方をふり返る。日記（以後「あゆみ」）を読み返したり家の人や自分の生活の仕方をどのように考えているか、何を願っているかをインタビューしたりする。子どもは家庭生活における家族との関係や自分の存在を意識して課題をもち実践に向かう意欲が高まると考える。

実践交流会では、レポートや写真や具体物等を使いながら発表し、実践の内容や様子、感想等が聞き手に伝わるようにし、友達のプロジェクトから「よさ」を共有できるようにする。

##### イ 「かかわり」

グループで自分が得たことや困っていることなどを出し合うと共に、その内容や成果を全体で出し合い1学期の学びをふり返らせる。自分の学びに友達の学びが加わり、自分の学びの評価を意識

させることにもなると考える。

実践計画を立てる際は、まず自分なりにできそうなことを書き出させる。それを元に友達と実践の方法について話し合い付加や修正などを行って、実践の見通しを持たせ自分もできそう、やってみようという意欲を喚起する。実践ができるだけ単発に終わるのでなく長期休暇を生かした取り組みとなることにも注意を促す。

実践交流会は、全体で行い友達の工夫や成果に着目した感想を述べ合うようにする。各家庭の事情等により実践内容には差異が見られると思うが、全員が必ずよいところを認められるように配慮し自己有用感を損なわないようにしたい。

#### ウ 実践的自覚へのデザイン

家庭にもこの実践のねらいや取り組みの内容を知らせ協力を仰ぐ。実践したことはレポートにまとめさせる。実践記録を残すことで自分が行ったことや工夫したこと、気づいたことが明確となり、そこからさらなる課題を見出し工夫を重ねていく主体的な実践への発展や、技能の習熟が期待できる。家の人からのコメントももらい、役に立つ喜びが感じられるようにする。

実践交流の場では、友達の実践を自分と比較しながら聞くようにし、自己評価と他者評価を交えてふり返り、つぎの実践に活かしていく。そして、できるようになった喜びや学んだことを家庭生活に活かす意味、実践方法の工夫を学級全体で共有し次の学習や実践への意欲を高めたい。

このように、学んだことを生活に生かす経験の積み重ねが、プロセスの自覚につながっていくと考える。

#### (4) 学習計画（総時数6時間＋夏季休業）

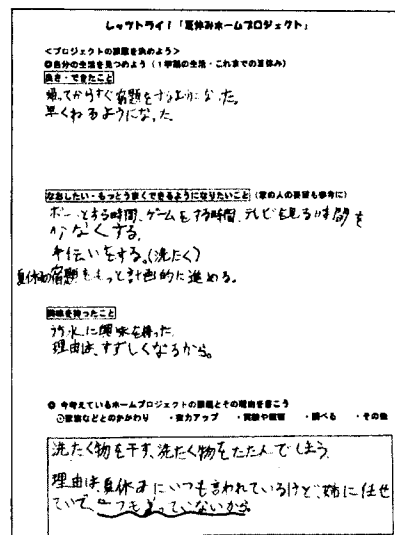
主な活動と内容	「よさ」の共有に関する手だてと意図
<p>1 めあてをもとに1学期の学びをふり返る            &lt;1学期をふりかえり自己の成長を知ろう&gt;            ・夏休みにホームプロジェクトを行い2学期の最初に交流会を開こうというめあてをもつ            ・以下のことについて話し合う              何を学んだか どのようにして学んだか              考え方で変わったことや新しく考えたことは              できるようになったことは何か</p>	<p><b>可視化</b>            1学期に学習したことを観点に沿ってワークシートにまとめることで、自分の学習の仕方を客観的にとらえられるようにする。  <b>「かかわり」</b>            1学期の学びをふり返る観点を明確にし、話し合うようにする。意見を板書に位置づけよさや不十分なところを明らかにする。学び方や思考のよさを価値づけ全体に広めていく。</p>
<p>2 これまでの夏休みの生活をふり返り            ホームプロジェクトの計画を立てる            &lt;これまでの夏休みの過ごし方をふり返り              課題を見つけよう&gt;            ・だんだん朝寝坊になってきた            ・食事が不規則になった            ・家のお手伝いをよくした            ・家族からの評価も聞いたよ            ・課題を決めたよ            &lt;ホームプロジェクトの計画を立てよう&gt;            ・友達と方法を話し合って自分の計画を立てよう            ・生活時間の使い方を決めて実行しよう            ・ごはんのみそ汁の朝ごはん作りができるよ            ・環境を考えた洗濯の仕方を調べるのもいいな            ・涼しくする工夫をしよう（打ち水、窓開け、            服装など）            ・家族にもホームプロジェクトを相談しよう</p>	<p><b>可視化</b>            5年生の「あゆみ」を読み返したり家族からの聞き取りをしたりして、これまでの夏休みの生活の仕方を見つめさせる。  <b>「かかわり」</b>            課題が同じ友達と実践の方法を話し合うことで実践への意欲をもたせ、友達の方法のよさを取り入れて計画を立てることができるようになる。</p>
<p>3 家庭実践を行う（夏季休業）            &lt;ホームプロジェクト計画を実行しよう&gt;            ・レポートを書こう</p>	<p><b>可視化</b>            レポートを書かせることで、自分の実践をふり返らせ次の実践への自覚を促す。</p>
<p>4 交流会を開き実践をふり返る            &lt;実践交流会を開こう&gt;            ・実行したこと 工夫 気づいたこと 自分の感想 家族の感想を発表しよう            ・ほかの人のやり方や工夫もなかなかいいな            ・これからもできることを続けていこう</p>	<p><b>「かかわり」</b> <b>実践的な自覚へのデザイン</b>            交流を通して人から認められる喜びを味わわせこれからの意欲を持続させると共に、学んだことを自分なりに工夫して生活に生かすよさを価値づけていく。</p>



きた。友達とともに学ぶことの大切さ、学んだことを実践する、生活に活かすことでよりよくなることが実感できるよさといった、家庭科の「よさ」を自覚し共有することができた。また、観察する、インタビューする、実験する学び方も明確にできた。それらを黒板に板書するのではなく模造紙に書き記し、教室に掲示して次時からの学習で想起などに活用できるようにした。

その掲示もあってか自分の夏休みの課題を持つ場では「よさ」として共有した学び方を活かすことができた。1学期の生活やこれまでの夏休みの過ごし方を振り返るためにどうしたらよいかとの問いかけに、単に思いついたことを考えるだけでなく「家の人にインタビューしてはどうか。」という意見が子どもから出たのである。それに昨年までの「あゆみ」を読み返すという方法を教師から示した。それらの手だてにより各自の生活実態を「よさ・できたこと」「なoshたい・もっとうまくできるようになりたいこと」「興味を持ったこと」の三つの観点に分けてワークシートに記入することができた(資料2)。

課題とワークシートに記入したことが関連していたものは、37名中34名で、調べ方、調べたことを観点別に分けてワークシートに書いたことで、課題設定につながる有意味化をもたらしたと考える(資料3)。また、課題についてA家族とのかかわりB実力アップC実験や観察D調べるEその他の5観点で○をつけさせた(複数可)。家族の意見を課題にした子どもは4名だったが、家族とのかかわりを意識して課題を決めた子どもは14名で、直接的ではないものの、家族にインタビューしたことは少なからず家族を意識することにつながったと考える。



資料2 生活を見つめるワークシート

	良さ・できたこと	なoshたい・もっとうまくになりたい	興味を持ったこと	課題(理由)	観点
1	省エネ、6時半に起きる	朝のうちに宿題をやるラジオ体操に毎日行く	夕方ごろごろしない方法	エアコンを使わずエコにすずしくする方法	A C
2	宿題を帰宅後すぐやる	手伝い、ラジオ体操に行く	洗たく、みそ汁などの料理	取り扱い絵表示調べ(自分が汗をかきやすい)	C D
3	あゆみを書く量増加	ゲーム・TV多い、勉強する		家の家事をする(いろいろできる)	A B
4	みそしる作り			おいしい料理を作ろう	B
5	みそ汁つくり		体を冷やす食べ物 エコ	食べてエコ	D
6	トイレそうじをした	手伝い、だらだらしない、早寝早起き	体を冷やす食べ物	毎日玄関を掃く(家族とのかかわりと掃き方がわかる)	A B
7	朝ご飯を必ず食べる	注意は1回で済ます		朝ご飯にみそ汁を作り家族で食べる(調理実習で失敗した)	A B
8	手伝い		料理作り	料理大作戦	A
9	気候に合った服選び、洗たく物をどこに干すか	ラジオ体操から帰ってすぐ寝る	服の取り扱い絵表示の種類	洗たく表示に合った洗たくの仕方	C D
10	宿題を帰宅後すぐやる、早ね早起き	ゲーム・TV多い、手伝い、宿題を計画的に	打ち水	洗たく物を干す・たたむ・取り扱い表示調べ(いつも言われているが姉に任せてきたから)	A
11	洗たく、みそ汁作り	手伝い		いろいろな手伝い	A B
12	早起き(夏休み)	手伝い、宿題を早い時間に済ます	料理の楽しみ	いろいろな料理を作ろう(作るのが楽しい)	C D
13		寝るのがおそい、ゲーム・TV多い、手伝い、勉強		洗たく(身近に着るもので手伝いに役立つ)	C D
14	嫌いな物が少し食べられるようになった	早寝、勉強、手伝い	エコ、料理	手伝いを増やそう(あまりしていない)	A B
15	手伝い	お金の使い方、TV見過ぎ、勉強	庭仕事	みそ汁をもっとおいしく、シャツより水をよく吸う生地探し	B C
16	早寝、みそ汁作り、洗たく	手伝い、遊んでばかりおらず自分のためになることをする	料理、衣類のマーク	エコですずしく過ごす方法(温暖化防止、すずしく過ごしたい)	D
17	皿洗い、そうじ、洗たく、部屋の整理整頓	勉強を進んでする	料理	母がいない時ご飯を作る(料理がうまくなりた)	A B
18	あゆみを書く量増加	手伝い、PC・TV多い、体を動かす	栄養バランス、そうじ	食べ物の栄養について(栄養バランスが考えやすくなり便利、くわしく知りたい)	D
19	朝ご飯を必ず食べる、手伝い、早寝早起き	みそ汁作り、生活習慣、洗たく	みそ汁作り、洗たく、料理	いろいろな料理を作れるようになる(将来一人暮らしでも大丈夫なように)	A B E

20	1日のスケジュールを立てられた	早寝早起き、健康を考えた食生活、計画的に過ごす		時間の使い方を考えよう(ふだん計画的ではない)	B
21	帰宅後すぐ時間割を合わせる	<u>むだな時間多い</u> 、手伝い	服の表示	TV・まんがを控え手伝いをしよう(生活時間改善、家族とかかわりが少ない)	A
22	ごみ捨て、早寝	TV多い、勉強を夜にやる、寝てばかり	<u>ご飯にどんな栄養があるか</u>	栄養バランスを考えご飯とみそ汁を朝作ろう(家族に朝から元気にしてほしい、かかわりを増やす)	A B D
23	時々宿題を帰宅後すぐやることもある、体を冷やすと知ってスイカを食べる	宿題を帰宅後すぐやる		エアコンを使わずすずしくなる方法(いつもつけてしまうから環境にいい方法を調べたい)	D
24	自分の昼食作り、夕飯の手伝い	朝自分で起きる、早寝早起き、だらだらしない		エアコンを使わずすずしくなる方法(もったいないし環境にもいい)	D
25	自分から片付け	遅く起き朝食と昼食がいっしょになる、だらだら過ごす、勉強	打ち水	水をまいたらすずしくなるのか(いつまいたらいいか、どれくらいすずしくなるか知りたい)	C
26	ごはん・みそ汁作り		すずしくする方法	エコですずしく	D
27	ご飯、みそ汁作り、すずしくなる工夫が分かった	手伝い、勉強への取りかかりが遅い	体を冷やすこと	すずしくなる方法(いつも暑いから)	D
28	ごはん・みそ汁作り			栄養調べ	D
29	時間を考える	TV多い、勉強を夜もやる、	服の表示	手伝い、洗たくをする(授業よりうまくやりたい)	A B
30	ごみ捨てを進んでする	TV多い、早寝早起き、時間を有効に	取り扱い絵表示、体を冷やす食べ物、方法	体を冷やす食べ物や打ち水の効果、	D
31	手伝い	早寝早起き		自分に合った生活時間	A B
32	ご飯作り、1日のスケジュールを立てられた、手伝い	洗たく、栄養を考えた料理、家事	料理、洗たく物のよごれのおち方	栄養や洗たく表示を見て実力アップ(学習で学んだことを活かす)	B
33	みそ汁作り	手伝い		料理をしよう	B
34	早寝早起き、ラジオ体操、水やり	二度寝、手伝い、1日のスケジュールを立て実行		手伝いのことを考えて生活時間を直す(去年の夏休みは規則正しい生活ができなかった)	A E
35	早起き、休日のご飯作り	ラジオ体操に行く、そうじ	料理	料理を作る(感想やアドバイスを家族にもらいかかわりを増やす、うまく作れるように)	A B
36	宿題を早めに済ます	早寝早起き、手伝い、TV多い	環境のこと、栄養バランス、季節に合った衣服の選び方(通気性・吸水性など)	生活時間の改善(早く寝られる) 打ち水(楽しそう)	B C
37	早寝早起き、朝勉強するラジオ体操	くつ下を裏にしてしまう、料理	食べ物の組み合わせ	食べ物の組み合わせを考えた朝ご飯作り(おいしくしたい)	B C

資料3 ワークシートの記述

四次の実践発表会でも、発表の準備としてワークシートで実践内容を整理して発表できるようにした。項目はめあて、方法や工夫、取り組みの様子、良かったところ・成長したところ、改善点や今後の課題、その他の感想である。それらを考え文章化するために実践を見直しふり返し、自分の伝えたいことが明確になり全員が詰まることなく発表することができた。実物を見せながらの発表やクイズを交えての発表もあり、発表方法にも工夫が見られた。それも発表内容が自分の中で整理されどのように発表すれば伝わりやすいかを考えることができたからである。

このように、ワークシートの活用により自分の学びの過程や思考の流れをふり返ることができた。また、それを表出することにも有効であったと考える。

## ② 「かかわり」

### ・付箋の活用

課題解決の見通しを持つ場では、実践計画を立てるために、まず計画の具体化に結びつく方法を各自が付箋に書いた。思いつくことを付箋に書いていくことで自分の考えも広がり、付箋の枚数を重ねていくうれしさもあってアイデアをたくさんだそうという意欲付けにもなった。

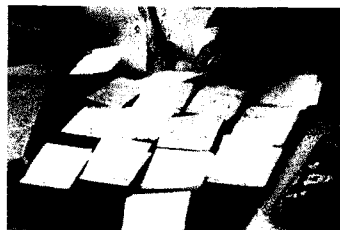
同じような課題でグループを作り各自の付箋を1枚の模造紙にはり、分類したり見出しを付けたりした(写真2)。同じ種類のをまとめる、線で囲って見出しを付けるなどの作業を進めるためには、友達の付箋を読まねばならない。そこから、話し合いの論点が見えてくるのである。しかし、グループによって作業の仕方、まとめ方に差がみられた。うまく進めているグループの方法をとりあげ全体に価値付ける必要があった。くり返し経験することだけでなくどのような方法がよい

か明らかにすることが意見を分類しまとめていくことのスキルアップにつながっていくと考える。

付箋を書く



付箋をまとめる



付箋を見て話し合う



・課題別グループでの話し合い

写真2 付箋を使っでのグループ活動

前述したように、同じような課題ごとにグループを作り計画を話し合うこととしたのは、「同じような課題の人で集まって話し合ったらいろいろな考えが出ていい。」とこれまでの学び方をふまえた子どもの意見からである。グループは〔生活時間の工夫〕〔手伝い〕〔ご飯とみそしる作り〕〔いろいろな料理〕〔栄養調べ〕〔洗たく・取り扱い絵表示調べ〕〔エコですずしくする方法〕の7つである。

話し合いでは新たな方法を得るだけでなく、もっとこうしたら、こんな方法もあるなど具体的な方法まで意見を出し合うことができた。同じ家庭の仕事といっても、各家庭によって時間ややり方が違うことにも気づき、自分に適した方法を考える必要性にも気づいている様子が見られた(資料4)。しかし、生活時間の工夫のグループでは立てたスケジュール通りに実行できなかったという1学期の失敗を改善する具体的方法を見出せず、同じようにスケジュール表を作ることになっていった。

洗たく・取り扱い絵表示調べグループが問題点として議論していたことは、取り扱い絵表示などを調べて表に書くだけではこのプロジェクトに合わないのではないかとということである。単にインターネットなどで調べてまとめるのでは自分の体験を通しておらず、プロジェクトの主旨である生活をよりよくすることに役立たないという理由からである。それを全体に問いかけることで、実際の生活に活かすようにしなければホームプロジェクトとしての価値がないことを全体に意識づけることができた。

このような話し合いの後、各自でワークシートにホームプロジェクトの計画を書いた(資料6)。ネーミングを考えること、目指すゴールの様子や姿を明確にイメージさせることで、実践意欲が高まるようにした。

この授業を受けての「あゆみ」には、友達との話し合いによって計画がより明確になったことや、実践への意欲が感じられる記述が見られた(資料5)。同じ課題のグループによる話し合いは、計画を立て具体的な方法や工夫を考えることや実践への意欲を持たせることの手だてとして有効であったと考える。

実践交流会ではそれぞれの取り組みの発表の後、ペアを決め相手の実践の良いと思ったところを述

\*模造紙に同じ種類ごとにまとめた後

- A児：けっこうまとまってない。  
だいたい5通りくらい。
- B児：片付けも入るの？
- C児：いろいろ洗たくとか料理とか。
- A児：じゃあ別々にする。
- C児：表を作るって具体的にどうするの？
- D児：日時を書いて○×をつける。
- A児：チェック表じゃなくて“～をする～をする”の方がいいんじゃない。
- T：それぞれの家庭のやり方が違うかもしれないよ。
- C児：はくだけにしようか。
- A児：全部しなくてもいいし。
- D児：表を変えてみたいな。
- C児：方法を細かく決めておけばすぐできる。例えば洗たくだったら何を洗うのかやることをしっかり決めておく。
- A児：ふだんいつお母さんがやっているか調査しておくといいね。
- C児：ごみ出しは朝だ。
- A児：朝とは限らないよ。
- D児：自分はそうだ。
- A児：仕事によるね。
- D児：罰をあたえるってどう？
- C児：自己判断でしょう。
- A児：方法と表はやった方がいい。
- D児：うん、この二つはやった方がいい。
- E児：家によるね。
- A児：後決めることないよね。
- C児：種類をはっきりさせよう。
- D児：やることを把握しよう。

\*種類と見出しを使ってまとめていく

資料4 グループでの話し合い

F児：今日夏休みにやる課題を決めた。私は洗たくにした。昨日の状態ではただやるだけの状態だったが、考えたり話し合ったりしてみると調べるのがたくさんあった。たくさんあって「調べるのが楽しみ」という気持ちでできそうだ。

G児：家庭で決めたホームプロジェクト。私はエコで涼しくにしました。内容おし水、服の工夫、シャワーなどです。おし水では本当に温度が下がるのか、服の工夫では白っぽく薄いものを着て、シャワーは朝・昼・夕・夜の中で一番気持ちよかった時に入ろうと思います。夏休みから頑張るぞ。

資料5 「あゆみ」の記述



べることにした。全員がペアやその他の友達からも良いところを認められ達成感を味わうことができ、さらに子どもの意見に教師からの評価も加えて「よさ」として価値づけることができた。

- ◎ ホームプロジェクトの名前  
計画を立てて黄金生活にしよう/HELP HELP HELP プロジェクト/料理大作戦/洗たくマスターになろう/エコクール作戦
- ◎ 目指すゴール
  - ・ 夏休み終了1週間前に宿題が終わる
  - ・ 夏休みが終わっても毎日手伝いができる
  - ・ 一つ一つの料理が上手になり日ごろから自分で簡単に料理が作れている
  - ・ 取り扱い絵表示が一目見て分かる表を作る
  - ・ エアコンを使わなくても十分にすずくなる
- ◎ 実行の方法
  - ・ ノートに毎日予定を書き実行して日記としてつづる
  - ・ 表を作って毎日チェックし親にその様子を聞く
  - ・ 最初は自分が作れる物から慣れていき作ったことのない物を家の人に聞いたり調べたりする 母と一緒に作り慣れてきたら自分一人で作る
  - ・ 取り扱い絵表示をインターネットなどで調べ表にまとめた後実行する
  - ・ 朝・昼・夕方に水をまいてまく前と後の温度を調べる
- ◎ レポート作成のためにすること
  - ・ 必ず文や写真や図に残す
  - ・ 家の人に感想やアドバイスをもらう

レポートタイトル「夏休みホームプロジェクト」

◎自分の「夏休みホームプロジェクト」に名前をつけよう。

**家の栄養士になろう!**

◎目指すゴールをイメージしよう。

「お父さんお母さん、お兄さんお姉さんを見て、自分も自分で作る。お父さんお母さんを見て、自分も自分で作る。お父さんお母さんを見て、自分も自分で作る。」

◎計画を立てよう。

★期間 7月20日～7月30日

★準備することや物

【お父さんお母さんとお話、画用紙(A4用紙)】

★実行の方法【できるだけ具体的に】

「お父さんお母さんを見て、自分も自分で作る。お父さんお母さんを見て、自分も自分で作る。お父さんお母さんを見て、自分も自分で作る。」

★レポート作成のためにすること

【お父さんお母さんを見て、自分も自分で作る。お父さんお母さんを見て、自分も自分で作る。お父さんお母さんを見て、自分も自分で作る。】

資料6 計画のワークシートと記述の抜粋

### ③ 実践的自覚へのデザイン

学習過程を通して「生活を見つめる→課題をもつ→実践的・体験的活動を取り入れて解決する→生活に活かす」の学びのサイクルに従ってワークシートを構成し、自分の思考の流れをふり回り家庭科での学びのサイクルのパターンを可視化し意識づけるようにした。また、家庭生活は家族全員で協力して営むものである。ホームプロジェクトの取り組みは子どもの考えだけでは生活に活かすことには限界があると思われるので、学級通信で保護者に趣旨を知らせ計画・実行への協力を仰いだうえで夏休みの実践に入った。

実践記録は、ノートに毎日のスケジュールを書いてふりかえりを書いたもの、画用紙に実験方法や結果を写真を交えて書き自由研究としてまとめたもの、取り扱い絵表示を一覧表にまとめたものなど、各自の取り組みに合わせてバラエティに富んだものであった(写真3)。それらは教室に展示し自由にみるようにした。

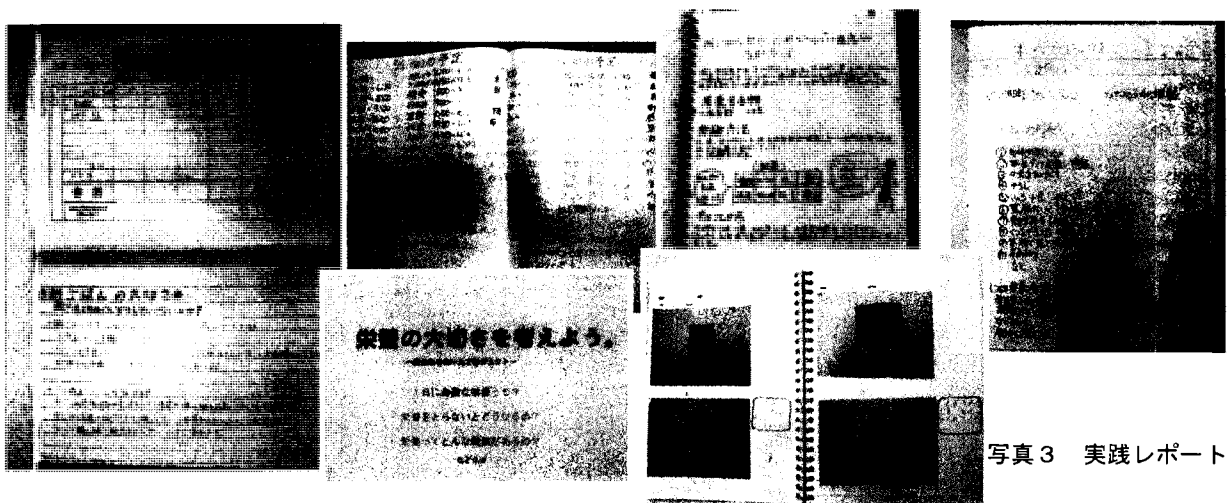


写真3 実践レポート

夏休み明けの実践発表会は(写真4)、可視化でも述べたように事前に発表準備のためのワークシートを記入してから行った。発表会後にも友達の発表と自分の実践と発表についてふり返るワークシートを記入し学習のまとめとした。それらのワークシートに記述されていたことや発表内容をまとめると以下ようになる。

<取り組みの方の工夫や良かったこと>

- ・ 聞いていたことや調べたことを実際に体験する・試すことができた  
(実験・インタビュー・本・インターネットなど)

- ・調べるときや実験するとき比較や体感するなどを取り入れた
- ・毎日続けることができた
- ・記録をとる、チェックする、ペースを決めるなどして行った

<成長したこと>

- ・手伝いをするのが少しは習慣づいた、自然にできるようになった
- ・生活時間についてもう一度考えさせられた、早寝早起きができてTVやゲームばかりということがなくなった
- ・果物や野菜などを上手に切ることができるようになった
- ・料理の調味料、洗剤の量などがだいたい分かるようになった
- ・1学期に失敗したみそ汁がうまく作れるようになった
- ・今までよりエコに注目できるようになった、栄養バランスを考えるようになった

<自分の生活に活かそうな事・取り組みたい事>

- ・エコで涼しくする方法（打ち水、窓側の整とん、服の色）
- ・1日のスケジュールを決める
- ・汚れた服はできるだけすぐに洗う
- ・回数をこなすと上手くなる
- ・手伝いをする
- ・ごはんを作る、もっと難しい料理に挑戦する
- ・季節に合った服選び
- ・自分に合った方法を見つける

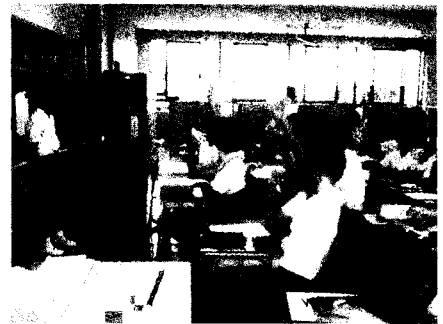


写真4 実践発表会の様子

発表内容や記述から、技能が習熟したり、生活をよりよくできたり、家族の一員としての自覚が高まったりしたと捉える。実際に体験する、試す、実験することが本当の意味での理解につながることや繰り返して行うことが習慣化や技能の習熟につながることを実感できた。実践発表会後の「あゆみ」の記述にも、友達の頑張りを認め今後の家庭実践への意欲が感じられるものがあった(資料7)。今後もこのような学び方を学習や家庭生活に活かしていくよう子どもに促していきたい。

#### (6) 題材を終えて

本題材はまさに「プロセスの自覚」そのものを促すものあり、家庭科の学びのサイクルをたどるように学習を進めていくことが重要であると考え学習計画を立てた。めあてそのものが学びのサイクルをたどるものとしたことで、学習のスタートから子どもはそのサイクルを意識しながら学習を進められたと考える。これまで述べてきたように、本題材において可視化・「かかわり」・実践的自覚のデザインという三つの手だてによって、「よさ」を共有することができたと考える。

しかし、以下のような点が課題である。

まず課題の妥当性についてである。生活をよりよくするとはどういうことなのかが子どもが具体的なイメージとして持っていたか、子どもの実際の生活の課題と設定した課題とが合致していたかなどが問題である。生活がよりよくなったと実感するには実践を重ねることが第一であり、その実践をするにあたっての課題は重要である。学習内容と実際の子どもとの生活との関連ができるだけ深まるような手だてを考える必要がある。

また、ホームプロジェクトがほとんどできなかったという子どもが1名いた。実践についての自己評価でも「もう少し」とした子どもが10名いた。失敗経験も学びには大切であり、できなかった子どもは、次は自分もしっかりやりたいと意欲を示していた。しかし、これからも繰り返し実践を促していくにあたっては、どのようなことからできなかった、不十分だったと感じていたかを探り、それに対しどのような支援が必要であるか明らかにする必要がある。また、自己評価も友達の実践と比較して「もう少し」という思いがあったら、自己評価なのでその基準には個々に違いがあった。評価するにあたって、その観点と基準をさらに子どもたちとも明確にして共通理解を図り進めていきたい。

H児：今日はとうとう来た実践発表会でした。頑張って夏休みをつかってやったものを発表しました。ぼくはおいしく簡単な料理を作ったことを発表しました。発表の仕方はまずまずでした。ぼくはさらに今後品物選びが上手になりたいので、買い物に行きました。どこでとれたのか、賞味期限などを見るといいそうです。頑張って作りたいと思います。

I児：今日家庭でホームプロジェクトの発表をしました。私がすごいと思ったのはOさんです。夏休み中毎日スケジュールを立ててその日の良かったこと悪かったことも書いていたからです。発表の仕方で良いと思ったのは△さんです。クイズにしていたのでとても分かりやすく、頭こも残りました。私もみんなに分かりやすくてよかったかな。

資料7 「あゆみ」の記述